

【 聖使徒フォマの主日アポリティキオン 第7調 】

ハリスト スか み よ 、 は か は ふ う ぜ ら れ て 、  
 神 墓 封

い の ち な る なんぢ は は か よ り か が や き 、 もん  
 生 命 爾 墓 輝 門

と ぎ さ れ て 、 しゅうじんの ふっか つ な る なんぢ は  
 閉 衆 人 復活 爾

もんと の ま え に た ち 、 なんぢの お お い な る あ  
 門 前 立 爾 大 憐

われ み に よ り て 、 か れ ら を も っ て た だ し き  
 因 彼 等 以 正

し んを わ れ ら に あ ら た め た ま え り 。  
 神 我 等 改 給

【 聖使徒フォマの主日コンダック 第8調 】

こ う え い は ち ち と こ と せ い しん に き す 。 い  
 光 榮 父 子 聖 神 歸 今

ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン。  
 何 時 世 世

ハリスト スか み よ もんと ぢ た る に 、 なんぢ い り し  
 神 門 閉 爾 入

と き 、 けんきゅう を この む フォマ は て を も っ て い  
 時 研 究 好 手 以 生

の ち を ほ ど こ す なんぢ の わ き を さ ぐ り て 、  
 命 施 爾 脅 探

たのしととともによべり、なんぢはわれの  
 他使徒借呼 爾我

しゅ およびか みなり。  
 主 及 神

【 聖三の歌 】

代禱) <sup>しゅ</sup>主よ、<sup>けいけん</sup>敬虔なる<sup>もの</sup>者を<sup>すく</sup>救い、<sup>およ</sup>及び<sup>われら</sup>我等に<sup>き</sup>聆き<sup>たま</sup>給え、

しゅよ、けいけんなるものをすくい、およびわれ  
 主 敬 虔 者 救 及 我

らにききたまえ。  
 等 聆 給

代禱) <sup>よよ</sup>世世に、

ア ミ ン。

せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなる  
 聖 神 聖 勇 毅 聖

じょうせいのものよ、われらをあわれめ  
 常 生 者 我 等 憐

よ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せい  
 聖 神 聖 勇 毅 聖

なるじょうせいのものよ、われらをあわれ  
 常 生 者 我 等 憐

めよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、  
 聖 神 聖 勇 毅

せいなるじょうせいのもものよ、われらをあわ  
 聖 常 生 者 の よ、 我 等 を 憐

れめよ。こうえいはちちとことせいしん  
 光 榮 父 子 聖 神

にきす、いまもいつもよよに、アミン。  
 歸 今 何 時 世 世 に、 ア ミ ン。

せいなるじょうせいのもものよ、われらをあわ  
 聖 常 生 者 の よ、 我 等 を 憐

れめよ。せいなるかみ、せいなるゆう  
 聖 神 聖 勇

き、せいなるじょうせいのもものよ、われらを  
 毅 聖 常 生 者 の よ、 我 等 を

あわれめよ。  
 憐

【 提綱（プロキメン）使徒の第3調 】

代禱) <sup>えいち</sup> 睿智、

誦經) プロキメン、<sup>わ しゅ おおい</sup> 吾が主は大なり、<sup>そのちから またおおい</sup> 其力も亦大なり、<sup>そのちえ はか がた</sup> 其智慧は測り難し、

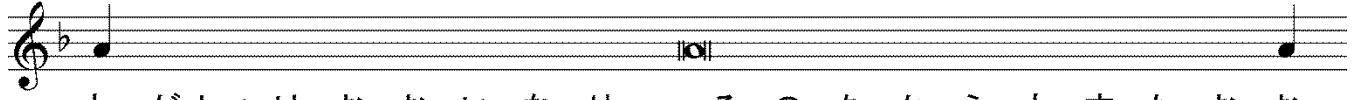
わがしゅはおおいなり、そのちからもまたおお  
 吾 主 大 其 力 亦 大

いなり、そのちえははかりが難  
 其 智 慧 は 測 り 難



た し。

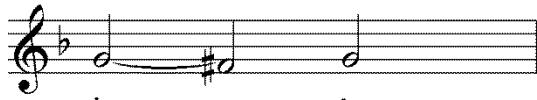
誦經) <sup>しゅ ほ あ</sup> 主を讃め揚げよ、<sup>けだしわれら かみ うた ぜん</sup> 蓋 我等の神に歌うは善なり、<sup>けだしこ たの こと</sup> 蓋 是れ樂しき事なり、



わ が しゅ は お お い な り、 そ の ち か ら も ま た お お  
吾 主 大 其 力 亦 大



い な り、 そ の ち え は は か り が  
其 智 慧 は 測 り が 難



た し。

誦經) <sup>わ しゅ おおい</sup> 吾が主は大なり、<sup>そのちから またおおい</sup> 其力も亦大なり、



そ の ち え は は か り が た し。  
其 智 慧 は 測 り が 難

【 使徒經 (アポストロス) 14 端 聖使徒行實 5 章 12 節~20 節 】

代禱) <sup>えいち</sup> 睿智、

誦經) <sup>せいしとこうじつ よみ</sup> 聖使徒行實の讀、

代禱) <sup>つつし き</sup> 謹みて聽くべし、

誦經) <sup>か ひ して て よ</sup> 彼の日、使徒の手に由りて、<sup>みんかん おお きゆうちよう きせき おこな</sup> 民間に多くの休 徴と奇蹟とは行われたり、<sup>しゅうみなころ</sup> 衆皆心

<sup>いつ</sup> を一にしてソロモンの廊に在り。<sup>ろう あ よ もの あえ かれら つ</sup> 餘の者は敢て彼等に附かざりき、<sup>しか たみ かれら あが</sup> 然れども民は彼等を崇

<sup>なんによ しん もの ますますおお しゅ つ</sup> めたり。男女の信ずる者、<sup>ひとびょうしゃ ちまた か いだ ゆかおよ</sup> 増 多く主に就き、人病者を衢に昇き出して、床及び

<sup>とこ お す</sup> 榻に置き、<sup>そのかげ あるい これ おお</sup> ペトルの過ぎて、其影の或は之を蔭わんことを <sup>こいねが いた またおお</sup> 冀うに至れり。又衆くの人

<sup>きんぼう しょゆう や ものおよ おき うれ もの たづさ</sup> は、近傍の諸邑より、病める者及び汚鬼を患うる者を <sup>あつま</sup> 攜えて、イエルサリムに集れり、

<sup>みない え</sup> 皆愈ゆるを得たり。<sup>しさいちようおよ およ かれ とも もの</sup> 司祭長及び凡そ彼と偕にする者、<sup>いたん ともがら た</sup> サドケイの異端の徒は、起ち

<sup>ねたみ み</sup> て、嫉に満てられ、<sup>そのて して お これ ひとや くだ</sup> 其手を使徒に措きて、之を公獄に下せり。<sup>しか しゅ つかいよるひとや</sup> 然れども主の使夜獄の

<sup>もん ひら かれら ひ いだ い ゆ でん た こ せいめい ことば ことごと たみ</sup> 門を啓き、彼等を引き出して曰えり、往きて、殿に立ち、此の生命の言を悉くの民に

かた  
語れ。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) そのころ、多くのしるしと奇跡とが、次々に使徒たちの手により人々の中で行われた。そして、一同は心をつにして、ソロモンの廊に集まっていた。ほかの者たちは、だれひとり、その交わりに入ろうとはしなかったが、民衆は彼らを尊敬していた。しかし、主を信じて仲間に加わる者が、男女とも、ますます多くなってきた。ついには、病人を大通りに運び出し、寝台や寝床の上に置いて、ペテロが通るとき、彼の影なりと、そのうちのだれかにかかるようにしたほどであった。またエルサレム附近の町々からも、大ぜいの人が、病人や汚れた霊に苦しめられている人たちを引き連れて、集まってきたが、その全部の者が、ひとり残らずいやされた。そこで、大祭司とその仲間の者、すなわち、サドカイ派の人たちが、みな嫉妬の念に満たされて立ちあがり、使徒たちに手をかけて捕え、公共の留置場に入れた。ところが夜、主の使が獄の戸を開き、彼らを連れ出して言った、「さあ行きなさい。そして、宮の庭に立ち、この命の言葉を漏れなく、人々に語りなさい」。

\*\*\*\*\*

代禱) <sup>えいち</sup> 睿智、

誦經) アリルイヤ、

【 アリルイヤ 第8調 】

アリル イ ヤ、アリル イ ヤ、  
ア リル イ ヤ。

誦經) <sup>きた</sup> 来りて <sup>しゅ</sup> 主に <sup>うた</sup> 歌い、 <sup>かみわ</sup> 神 <sup>すくい</sup> 我が <sup>かため</sup> 救 <sup>よ</sup> の防固に呼ばん、

アリル イ ヤ、アリル イ ヤ、  
ア リル イ ヤ。

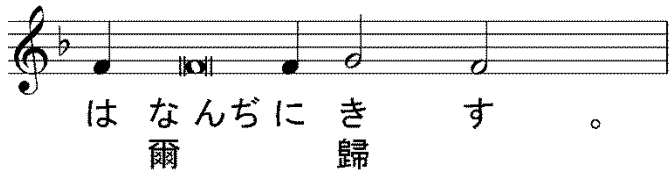
誦經) <sup>けだししゅ</sup> 蓋 <sup>おおい</sup> 主は <sup>かみ</sup> 大 <sup>おおい</sup> なる神、 <sup>おう</sup> 大 <sup>しよしん</sup> なる王にして <sup>まさ</sup> 諸神に勝る、

アリル イ ヤ、アリル イ ヤ、



代禱) <sup>えいち</sup> 睿智、

誦經) イオアン<sup>でん</sup>傳の<sup>せいふくいんけい</sup>聖福音<sup>よみ</sup>經の讀、



代禱) <sup>つつし</sup> 謹 <sup>き</sup> みて聽くべし、

誦經) 是の日、即 <sup>こ</sup> 七日<sup>ひ</sup>の首<sup>すなわちなぬか</sup>の日、既<sup>はじめ</sup>に暮<sup>ひ</sup>れて、門徒<sup>すで</sup>の集<sup>もんと</sup>れる處<sup>あつま</sup>の門<sup>ところ</sup>、イウデヤ人<sup>もん</sup>を懼<sup>じん</sup>

るに因<sup>よ</sup>りて閉<sup>と</sup>ぢたるに、イイスス來<sup>きた</sup>りて、中<sup>なか</sup>に立<sup>た</sup>ちて、彼等<sup>かれら</sup>に謂<sup>い</sup>う、爾等<sup>なんぢら</sup>に平<sup>へい</sup>安<sup>あん</sup>。此<sup>これ</sup>を言<sup>い</sup>

いて、彼等<sup>かれら</sup>に己<sup>おのれ</sup>の手<sup>て</sup>足<sup>あし</sup>及<sup>およ</sup>び脅<sup>わき</sup>を示<sup>しめ</sup>せり。門徒<sup>もんとしゅ</sup>主<sup>み</sup>を見<sup>よ</sup>りて喜<sup>よろこ</sup>べり。イイスス復<sup>また</sup>彼等<sup>かれら</sup>に謂<sup>い</sup>え

り、爾等<sup>なんぢら</sup>に平<sup>へい</sup>安<sup>あん</sup>、父<sup>ちち</sup>が我<sup>われ</sup>を遣<sup>つかわ</sup>しし如<sup>ごと</sup>く、我<sup>われ</sup>も亦<sup>また</sup>爾等<sup>なんぢら</sup>を遣<sup>つかわ</sup>す。此<sup>これ</sup>を言<sup>い</sup>いて、氣<sup>き</sup>を噓<sup>ふ</sup>

きて、彼等<sup>かれら</sup>に謂<sup>い</sup>う、聖<sup>せい</sup>神<sup>しん</sup>を受けよ。爾等<sup>なんぢら</sup>人<sup>ひと</sup>に其<sup>その</sup>罪<sup>つみ</sup>を釋<sup>ゆる</sup>さば、則<sup>すなわち</sup>釋<sup>ゆる</sup>さる、人<sup>ひと</sup>に其<sup>その</sup>罪<sup>つみ</sup>

を留<sup>とど</sup>めば、則<sup>すなわち</sup>留<sup>とど</sup>めらる。イイススの來<sup>きた</sup>りし時<sup>とき</sup>、十<sup>じゅう</sup>二<sup>に</sup>の一<sup>ひとり</sup>なる<sup>しょう</sup>フォマ、稱<sup>しょう</sup>してディデ

ィムと云<sup>い</sup>う者<sup>もの</sup>、彼等<sup>かれら</sup>と偕<sup>とも</sup>に在<sup>あ</sup>らざりき。他<sup>た</sup>の門徒<sup>もんとかれ</sup>彼<sup>い</sup>に謂<sup>われ</sup>えり、我<sup>われ</sup>等<sup>しゅ</sup>主<sup>み</sup>を見<sup>しか</sup>たり。然<sup>しか</sup>れども彼<sup>かれ</sup>

は之<sup>これ</sup>に謂<sup>い</sup>えり、我<sup>われ</sup>若<sup>も</sup>し其<sup>その</sup>手<sup>て</sup>に釘<sup>くぎ</sup>の迹<sup>あと</sup>を見<sup>み</sup>ず、我<sup>わ</sup>が指<sup>ゆび</sup>を釘<sup>くぎ</sup>の迹<sup>あと</sup>に入<sup>い</sup>れず、我<sup>わ</sup>が手<sup>て</sup>を其<sup>その</sup>脅<sup>わき</sup>に入<sup>い</sup>

れずば、信<sup>しん</sup>ぜざらん。八<sup>よう</sup>日を越<sup>こ</sup>えて、門徒<sup>もん</sup>復<sup>また</sup>内<sup>うち</sup>にあり、フォマも彼等<sup>かれら</sup>と偕<sup>とも</sup>にせり。門<sup>もん</sup>閉<sup>と</sup>ぢた

るに、イイスス來<sup>きた</sup>りて、彼等<sup>かれら</sup>の中<sup>なか</sup>に立<sup>た</sup>ちて曰<sup>い</sup>えり、爾等<sup>なんぢら</sup>に平<sup>へい</sup>安<sup>あん</sup>。次<sup>つ</sup>ぎてフォマに謂<sup>い</sup>う、爾<sup>なんぢ</sup>

の指<sup>ゆび</sup>を此<sup>ここ</sup>に伸<sup>の</sup>べて、我<sup>わ</sup>が手<sup>て</sup>を見<sup>み</sup>よ、爾<sup>なんぢ</sup>の手<sup>て</sup>を伸<sup>の</sup>べて、我<sup>わ</sup>が脅<sup>わき</sup>に入<sup>い</sup>れよ、信<sup>しん</sup>ぜざる勿<sup>な</sup>かれ、乃<sup>すなわち</sup>

信<sup>しん</sup>ぜよ。フォマ答<sup>こた</sup>えて彼<sup>かれ</sup>に謂<sup>い</sup>えり、我<sup>わ</sup>が主<sup>しゅ</sup>よ、我<sup>わ</sup>が神<sup>かみ</sup>よ。イイスス彼<sup>かれ</sup>に謂<sup>い</sup>う、爾<sup>なんぢ</sup>は我<sup>われ</sup>を見

しに縁<sup>よ</sup>りて信<sup>しん</sup>ぜり、見<sup>み</sup>ずして信<sup>しん</sup>ずる者<sup>もの</sup>は福<sup>さいわい</sup>なり。イイススは其<sup>その</sup>門徒<sup>もん</sup>の前<sup>まへ</sup>に於<sup>お</sup>いて、亦<sup>また</sup>他<sup>た</sup>の

多<sup>おほ</sup>くの奇蹟<sup>きせき</sup>、此<sup>こ</sup>の書<sup>しょ</sup>に載<sup>おこ</sup>せざる者<sup>もの</sup>を行<sup>こ</sup>えり。此<sup>これ</sup>を載<sup>おこ</sup>せたるは、爾等<sup>なんぢら</sup>がイイススは神<sup>かみ</sup>の子<sup>こ</sup>、

ハリストスなりと信じ、且 信じて、其名に因りて生命を得ん爲なり。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) その日、すなわち、一週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人をおそれて、自分たちのおる所の戸をみなしめていると、イエスがいってきて、彼らの中に立ち、「安かれ」と言われた。そう言って、手とわきとを、彼らにお見せになった。弟子たちは主を見て喜んだ。イエスはまた彼らに言われた、「安かれ。父がわたしをおつかわしになったように、わたしもまたあなたがたをつかわす」。そう言って、彼らに息を吹きかけて仰せになった、「聖霊を受けよ。あなたがたがゆるす罪は、だれの罪でもゆるされ、あなたがたがゆるさずにおく罪は、そのまま残るであろう」。十二弟子のひとりで、デドモと呼ばれているトマスは、イエスがこられたとき、彼らと一緒にいなかった。ほかの弟子たちが、彼に「わたしたちは主にお目にかかった」と言うと、トマスは彼らに言った、「わたしは、その手に釘あとを見、わたしの指をその釘あとにさし入れ、また、わたしの手をそのわきにさし入れてみなければ、決して信じない」。八日ののち、イエスの弟子たちはまた家の内におり、トマスも一緒にいた。戸はみな閉ざされていたが、イエスがいってこられ、中に立って「安かれ」と言われた。それからトマスに言われた、「あなたの指をここにつけて、わたしの手を見なさい。手をのばしてわたしのわきにさし入れてみなさい。信じない者にならないで、信じる者になりなさい」。トマスはイエスに答えて言った、「わが主よ、わが神よ」。イエスは彼に言われた、「あなたはわたしを見たので信じたのか。見ないで信ずる者は、さいわいである」。イエスは、この書に書かれていないしるしを、ほかにも多く、弟子たちの前で行われた。しかし、これらのことを書いたのは、あなたがたがイエスは神の子キリストであると信じるためであり、また、そう信じて、イエスの名によって命を得るためである。

\*\*\*\*\*

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい  
主 光 榮 爾 歸 光 榮

はなんぢにきす。  
爾 歸

※代式祈祷③ へ